

令和 7 年 6 月 17 日現在

機関番号：35307

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2024

課題番号：19K00638

研究課題名（和文）量性を持つ副詞句・名詞句を介在とした日本語構造変化の研究

研究課題名（英文）Structural changes in Japanese involving noun phrases and adverbial phrases with quantity properties

研究代表者

岩田 美穂（Iwata, Miho）

就実大学・人文科学部・准教授

研究者番号：20734073

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、量的性質を持った副詞句と名詞句が介在する変化が、日本語の構造変化の中の一つの類型であることを実証的に示すことである。副詞句から名詞句への変化の事例として、タリ（ミ・ヌ・ツ）、ナリ、ヤラ、トカ、ノなどの並列形式を取り上げた。これらの形式は、もともと文末に付される接辞であったものが、主節の述語や名詞句に付加される段階を経て、名詞句となることを実証した。名詞句から副詞句への変化の事例として、キリ・カギリを取り上げた。これらはいずれも時間的な範囲を表すようになったことで時間副詞的に用いられるようになり、副詞句化したことを考察した。成果は論文や研究発表として公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語史研究においては近年構造変化を扱った研究が注目されている。本研究では、並べ立てが行われることで集合を表す並列形式や時間の範囲を表すようになったギリやカギリが、「量的な解釈」を得たことでその性質を変化させ、副詞句から名詞句へ、名詞句から副詞句へと変化したこと実証的に示した。その結果「量的な解釈」が介在する名詞句と副詞句の相互連関があることを明らかにした。この成果は、日本語史における構造変化の一つの類型として位置づけられる点で意義がある。また、「量性」という一つの性質を中心として、両方向への変化が起こる可能性があることを示すことができる点で、重要な事例といえる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to demonstrate empirically that changes involving adverbial phrases and noun phrases with quantitative properties constitute one type of structural change in Japanese. As examples of changes from adverbial phrases to noun phrases, we examined the developmental process of parallel forms such as Tari (Mi, Nu, Tsu), Nari, Yara, Toka, and No. These forms originally functioned as suffixes attached to the end of sentences. Subsequently, these forms underwent a stage where they were added to the predicate or noun phrase of the main clause, eventually becoming noun phrases. As examples of changes from noun phrases to adverbial phrases, we examined “kiri” and “kagiri.” We examined how these forms came to be used as temporal adverbs by indicating temporal scope and how they became adverbial phrases. The results have been published in papers and research presentations.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語史 文法史 副詞句 名詞句 並列 限定

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本語史研究は、近年、特に文法史の分野において、伝統的な形態論・意味論の枠組みに捉われない日本語の体系・構造そのものの変化の解明を目指した研究が活発になってきている。こういった構造変化に関わる研究は、2000年代前後から活発になってきたものであり、近年ようやく研究の蓄積ができつつある状況である。そのため、さまざまな事例・観点からのさらなる包括的な研究が必要とされている。

そこで本研究では、そのような構造変化を起こす一つの要因に、量的性質を持った副詞句(連用修飾)および名詞句(連体修飾)の介在があることを示すことを目的とする。ここで述べるところの副詞句(副詞性)とは広い意味での述語に係る連用機能を持つ句、名詞句(名詞性)とは典型的には述語動詞の項となり得る性質を持つ句を指すこととする。

副詞句と名詞句が介在する構造変化には、副詞性を持つ句や節が主節動詞の項となる名詞句へ変化する場合と主節内部の名詞句が従属節などの副詞性を持つ句や節へと変化する場合の二つの方向性がある。このような変化自体はこれまでも個別の現象として数多く指摘されてきた。しかし、個々の現象が日本語の構造変化という観点から見てどのようにいちづけられるのかという点にまで踏み込んだ研究は多くはない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、量的性質を持った副詞句と名詞句が介在する変化が、日本語の構造変化の中の一つの類型であることを、文献にみられるデータを重視し、実証的に示していくことである。副詞句から名詞句への変化の事例としてタリ、ナリなどの例示を表す並列形式の発達、名詞句から副詞句への変化の事例としてギリ・キリ、カギリなど限定を表す名詞が条件を表す従属節になる変化を取り上げる。このような変化は、あらゆる名詞句・副詞句に起きるわけではなく、「量(程度)」を表すという共通性が必要であると考えられる。遊離数量詞に代表されるように、数量や時を表す要素は、文中で副詞的にも名詞的にもふるまうことができることが知られている(3人の学生が来た/学生が3人来た)。「量」は事態(出来事)にも事物にも関与する概念であるということが出来る。本研究では、このような名詞性と副詞性の両方の性質を含む数量的な要素を中心として一方では名詞的な要素が副詞的な要素へ、一方では副詞的な要素が名詞句へと発達する過程が、日本語史における構造変化の中で繰り返し起こる一つのルートとなっているのではないかと考える。これらの事例を通して、名詞性と副詞性の両方の性質を含む量的要素が媒介となる双方向的な変化を考察する。

3. 研究の方法

具体的には、(1)並列形式は、注釈句・引用句といった副詞的性質の句から、名詞的性質を持った句へと変化する。この性質の変化の鍵は、「並列される」ことによって量的解釈が可能になったことである、(2)ギリ・キリ、カギリなど限界点を表す形式名詞が、条件句などの副詞的性質の句へと変化する事例がある。この性質の変化は、ギリ・キリやカギリが量的解釈を持つようになったことが一つの要因である、の2点を考察する。

(1):現代日本語に見られる並列形式は多岐に渡るが、主に述語句並列を作るタリと歴史的にタリと同様の機能を有していたと考えられるミ・ツ・又の3形式を対象とした。また、合わせて名詞・述語句並列を作るヤラ、ノダ、トカ、ナリを対象とした。これらの個々の形式の成立過程が、全体としてどのようにまとめられるかを考察する。

(2):ギリ・キリの変遷過程を追う。先行研究によって、キリ・ギリが発達していくのは近世期以降であることが分かっている。よって、近世期のキリ・ギリを調査し、変遷過程を確認する。特に、「彼は出て行ったきり、帰ってこなかった」のような副詞句用法がどのように成立したのかを中心に検討する。「カギリ」については、中古から既に副詞句的に用いられているため、上代・中古を中心として用例を収集する。カギリが持つ多様な用法を整理し、特に「レポートを出さないかぎり、単位は与えられない」のような条件節的に用いられるカギリがどのように成立したかを検討する。

以上から、名詞性と副詞性の両方の性質を含む量的要素が媒介となる双方向的な変化を考察する。

4. 研究成果

(1)

まず、述語句並列を担うタリ(又・ツ・ミ)の変遷について考察した。

最も古くから見られるミ並列について上代・中古の文献を調査し、ミ並列の成立と展開について考察を進めた。その結果、ミによる並列は、中止法の機能を有し、その延長として連用形やテ形と同様に反復構文に用いられるようになったこと、中古末頃から衰退しはじめ、新たに成立した又並列に推移したことなどが明らかとなった。

ミ並列や又並列はこのような反復構文の一種として用いられることで「~又~又」が一塊として認識され形式化していったものと考えられる。反復構文としてのみ用いられるミ並列・又並列は、副詞句として主節述語に付加されているが、15世紀頃から発達するツ並列、タリ並列は反

復構文として副詞的に用いられる一方で、スルを伴うことで主節述語句として用いられるようにもなる。スルを伴って述語化するこの段階の並列句は、現代語の感覚としては「動名詞＋スル」に類似するよう思えるが、ツ・タリは述語化するにあたって一旦名詞性を獲得したと思われる段階が見られない。よって、副詞句として用いられていた並列句の動作性が前面化され、述語として機能するようになるにあたって、屈折のためにスルが付されたと考えるのが妥当である(青木 2010 参照)。

次に、両用の形式であるナリ・ヤラ・トカ・ノについて考察した。これらの形式は、付加節経由で発達するナリ・ヤラと、引用句経由で発達するトカ・ノに分けられる。付加節経由で発達するナリ・ヤラはまず単独で注釈節を形成し、主節に付加される形で用いられるようになる。この用法の延長として主節の背景をあれこれと列挙する形で用いられるようになり、「～ナリ～ナリ」「～ヤラ～ヤラ」の形が一塊であると認識されるようになったと考えられる。その後主節内の名詞句に付加され、主節内の要素を列挙するようになったことで、並列句自体が名詞句の解釈を受けようになる。引用句経由で発達するトカ・ノは、いずれも初期にはもっぱら引用句として用いられている。トカ・ノは複数の発話を並べたものでその句末に表れていた形式である。その後トが持つ構文機能に支えられて、統語的なふるまいを拡張していく。引用句がもともと名詞句の性質を有することから、並列句そのものが名詞句としての解釈を受けようになったと考えられる。

これらの形式に共通する統語的な変化の特徴として付加節または引用節を形成する要素であったことがあげられる。並列とは元来、語ないし句を単純に並べ立てることによって成立する。並列形式はいずれも文ないし句の最末尾に現れる形式であった。つまり、並列形式はもともと単純な語・句の並べ立てが行われていた際に、末尾に現れていた形式であるといえる。このように見てみると、並列形式はいずれも節末の要素が並列句としていかに名詞性を獲得していくかという変化であるとまとめることができそうである。そのパターンには上で述べたように 2 パターンある。小柳(2019)では、副詞化の条件として意味的に量性・様相性を持つこと、統語的条件として挿入句・連体修飾句という環境での読み替えが起こることの 2 点をあげ、「特に名詞がここを通過して副詞の世界に入る、いわば「副詞の入り口」である」(p.322)と述べる。並列句は、注釈句由来も引用句由来も、要素が並べ立てられることによって、ある種の量性を持つ副詞句的な要素となっていると言える。「量性」という性質を有し、さらに連用修飾、連体修飾という環境から名詞性を獲得していく並列句は、小柳(2019)の述べる副詞化とは逆のルートを通った名詞化であると位置づけられる。上記のように多くの並列形式がこのルートを通っている。日本語における並列形式の豊富さは、このような量性と連用修飾・連体修飾を介した名詞句と副詞句の相互交流が起きやすいという特徴がもたらすものであると考えられる。

以上の成果は、研究論文や研究発表の形で公開した。

(2)

形式名詞ギリが条件形式化する背景について、形式名詞の文法化の点から見てどのように位置づけられるかを考察した。ギリは、条件形式以外にも諸方言において様々な要素に変化しており、多様な変化の過程を経たとみられる。そのような諸方言のデータと、中央語の歴史におけるギリの変化を合わせて、形式名詞としての変化としてどのようなパターンがあったのか、を整理検討した。その結果、条件形式は助詞を伴った副詞句への変化として位置づけられ、ギリの変化としては初期段階に位置づけられることが明らかとなった。その他にも、愛媛、長野、群馬等に見られる限定の副助詞的な形式への変化は、述語名詞としての用法から、共通語を中心に見られる際限を表す副詞句の用法は、江戸・東京語を中心として独自に発達したものとみられる。この成果は、研究発表を行った。

次にキリの上接語とキリがどのような構文で用いられるか、の 2 点を観点としたデータから、名詞句から副詞句への過程として次のような段階を想定した。キリはもともと時間名詞を取り、時間の「範囲」を表していたものが、指示語「これ」を取ることで次第にその範囲の終了時点という「特定時」に焦点が移った。指示語が「これ」「それ」「あれ」と展開し、指示語「それ」を取るようになり前文脈が指示されるようになったことで、指示語「それ」の部分に文脈をそのまま取るようになったことで夕形接続が可能な副詞句(節)を形成するようになった。と同時に、特定時を表し、節を取るようになったことで、「～後で」「～時に」のような時間副詞節を同様の解釈を受けようになり、これらの時間副詞節を形成する名詞と同様に「で」を伴わずに副詞節を形成できるようになった。このことから、キリ(ギリ)において、副詞句形成への転機となったのは、特定時を指すようになったこと、つまり「時間的限定性」であると言える。この「時間的限定性」はキリ(ギリ)を条件形式として用いる九州方言に繋がっていると考えられ、前年度の研究成果を中央語の歴史から補うものとなった。このような時間的限定性が、名詞句から副詞句への一つのルートとなりえることを実証できたと考える。この成果は論文として公開した。

次に、同じ限定を表すカギリについても調査を行った。カギリも元々名詞に接続し、範囲を表す要素である。カギリは、調査の結果、キリ・ギリとは異なり、かなり早い段階から副詞句として用いられていることがわかった。当初、キリ・ギリとカギリは似たような変化をしていると予測していたが、予測とは異なる結果となったことから、カギリについてキリ・ギリとは別の経過を考える必要性がでてきた。そこでまず上代・中古にみられるカギリの用法を整理し、副詞句用法としてのカギリの成立について考察することとした。上代・中古においてカギリの単独用法は、

「限りある命」のように限界点を表す。一方、連体修飾節を伴うカギリでは、「世にあらむ限り」のように「限界点まで一杯」という「全量」を表す例が多い。全量には、「生けるかぎり」のような期間、「みなあるべきかぎり」のような数量、「心のいたる限り」のような抽象量がある。また、「あやめの蔵人かたちよき限り選りて(あやめの蔵人で見た目のよい者だけを選んで)」のような「限定」の意味を表す例も見られる。「ある範囲の中の全て」は、より大きな集合が想定される場合、その大きな集合の中の一部ということになるため「限定」の解釈になると考えられる。以上からカギリの用法は「限界点」「全量」「限定」と派生したとみられる。次に、条件解釈のできる例は「ことなるついでなきかぎりは参らず」のようにいずれも連体修飾節を取り、前件が否定に限られるという制限がある。これらはいずれも「期間」の解釈ができるものであり、仮定条件的用法は期間の用法からの派生であると考えられると考察した。カギリが副詞句としてふるまうようになる契機には、時間的な範囲を表す用法を獲得し、時間副詞のように用いられるようになったことが継起となっている。カギリは、主節事態が成立する時間的な範囲を表す時間副詞句としてもちいられるようになった。そのような時間副詞としての使用がなされる中で、一部否定をとったときに、条件的な解釈ができるようになったことで条件形式として認識されるようになったと考えられる。

時間的な範囲を表していたカギリが、なぜ条件的な解釈になったのかという点については、「否定」が強く作用していると考えた。否定文は、その前提として対応する肯定的事態が想定されているという特徴がある。現代日本語における仮定条件を表すバは、単なる状況の設定では用いにくく、特に「Pである場合」と「Pでない場合」という条件的分岐が想定できる場合に用いやすい傾向にある。否定文が肯定的事態を含意とするならば、否定文では常に「Pでない場合」と「Pである場合」が想定されていることになる。つまり、否定文は条件的分岐を含意しているということになる。このような特徴があることで、条件的な解釈が生じたと考察した。

この成果は研究論文として公開した。

【参考文献】

青木博史(2010)『語形成からみた日本語文法史』ひつじ書房

小柳智一(2019)「副詞の入り口 副詞と副詞化の条件」森雄一・西村義樹・長谷川明香(編)『認知言語学を拓く』pp.305-323、くろしお出版

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 岩田美穂	4. 巻 18
2. 論文標題 上代・中古の名詞並列形式	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 就実表現文化	6. 最初と最後の頁 152(1) 133(20)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岩田美穂	4. 巻 106・107
2. 論文標題 形式名詞キリ（ギリ）の展開 タ形接続を中心として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 語文	6. 最初と最後の頁 98-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岩田美穂	4. 巻 15
2. 論文標題 述語句並列におけるミ並列の位置づけ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 就実表現文化	6. 最初と最後の頁 48(33)-62(19)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岩田美穂	4. 巻 19
2. 論文標題 形式名詞カギリの用法 条件解釈になる場合を中心に	5. 発行年 2025年
3. 雑誌名 就実表現文化	6. 最初と最後の頁 42-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岩田美穂
2. 発表標題 形式名詞カギリの用法 上代・中古を中心に
3. 学会等名 尾道でことばの会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 岩田美穂
2. 発表標題 述語並列形式の発達過程
3. 学会等名 金水ゼミ・岡崎科研共同開催研究発表会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩田美穂
2. 発表標題 形式名詞キリ・ギリの変化 地理的バリエーションから見る変化の多様性
3. 学会等名 国立国語研究所主催 シンポジウム「日本語文法研究のフロンティアー日本の言語・方言の対照研究を中心にー」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩田美穂
2. 発表標題 並列表現形式発達の類型
3. 学会等名 第302回筑紫日本語研究会
4. 発表年 2025年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 青木博史・高山善行編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 164
3. 書名 日本語文法史キーワード事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------